

USEFUL PRINTING INFORMATION

印刷に関する用語、こぼれ話、業界のトレンドなどの情報を毎月ご紹介していきます。

SEZAX

M O N T H L Y

vol.134

U P

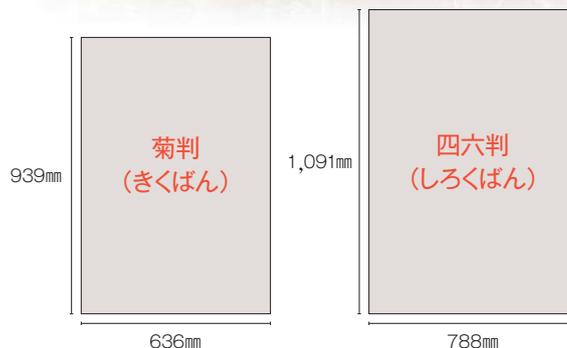
きくばん、しろくばんって何？

A系列なら菊判、B系列なら四六判、 少し大きめの2つの原紙について。

マンスリー UP vol.128 で、本・雑誌・カタログなどの仕上がりサイズについてご紹介しました。
今回は、こうした印刷物を刷る「原紙(実際に印刷機で刷られる用紙)」の大きさについてのお話です。

印刷物の仕上がりサイズは、A4、A5、B4、B5 が一般的だと言えるでしょう。A系列仕上りの印刷物はA列本判(625×880mm)、B系列の印刷物はB列本判(765×1,085mm)の原紙が基本とされていますが、実際には「少し大きめ」の原紙に印刷することが多くなっています。なぜなら面付けする際、面付けごとにドブ(vol.131参照)を取る必要があるからです。さらに最近ではベタや写真、平網等が多用され、こうした印刷物の色調を機械的に管理しやすいよう、印刷面の余白に余裕が必要だという理由もあります。

ちなみにA系列の少し大きめの原紙は菊判(きくばん:636×939mm)、B系列の少し大きめの原紙は四六判(しろくばん:788×1,091mm)と言います。ちょっと変わった名前ですが、それぞれ面白い由来がありますのでご紹介しましょう。いずれも発祥は明治の頃に遡ります。



菊判の由来

明治になって特に増えた印刷物に「新聞」があります。当時はドイツから輸入された700×1,000mmの用紙(和単位で2尺3寸×3尺3寸:寸のサイズが縦横ともに3寸なので三三判と言われていた)を4つ切りにして使っていました。しかし明治中期になると新聞紙面もにぎやかになり、紙面を大きくする必要が生じたため、今度はアメリカから25×37インチ(ほぼ636×939mm)の用紙を輸入。この用紙は「菊印判」という商標で売り出され、徐々に新聞用紙以外にも広く使われるようになります。そして、現在でも使われている菊判という名前が定着していきました。なお新聞の「聞」が「聞く=菊」に通じる、輸入紙のアメリカでの商標マークが菊に似た花のダリアだった、菊は皇室紋で風雅な印象があるなどにより、菊印判と名付けられたようです。

四六判の由来

江戸時代は鎖国が長く続いていたため、欧米から紙を輸入することはありませんでした。当時、一般的に使われていたのは、半紙と呼ばれる和紙。その中でも美濃地方で作られていた少し大判(1尺3寸×9寸:394×273mm)の和紙「美濃判」が人気を博し、日本旧来の標準判になっていました。明治時代に用紙が輸入され始めるようになると、イギリスのクラウン判の変形判が美濃判の丁度8倍の大きさ(31インチ×43インチ:ほぼ787×1,092mm)だったことから、受け入れられやすく「大八つ判」として広く流通。この大八つ判に32面付けで印刷すると、ページ仕上がり4寸×6寸(121×182mm)サイズの印刷物ができたことから、徐々に四六判という名前と呼ばれるようになりました。

印刷に関連してよく聞かれる菊判、四六判の名前の由来がおわかりいただけただけなのではないでしょうか? 実際原紙を見たいというお客様は、ぜひ当社工場見学へお越しください。



No.I290-ISO/IEC 27001
No.E2204-ISO14001 (本社・下丸子工場)
No.4412-ISO9001 (本社・下丸子工場)



SEZAX

セザックス株式会社

<http://www.sezax.co.jp>

<input type="checkbox"/> 本社・工場	〒146-0091 大田区鵜の木2-9-7	TEL 03 (3758) 2511 (代)
<input type="checkbox"/> 渋谷コア	〒150-0002 渋谷区渋谷3-19-1渋谷オミビル6F	TEL 03 (3400) 9211 (代)
		5F TEL 03 (3400) 9401 (代)
<input type="checkbox"/> 下丸子工場	〒146-0092 大田区下丸子2-20-4	TEL 03 (3758) 2516 (代)

株式会社セザックスクリエイティブ

〒150-0002 渋谷区渋谷3-19-1渋谷オミビル2F TEL 03 (3409) 4970 (代)

株式会社セザックスドキュメントソリューションズ

〒146-0091 大田区鵜の木2-9-7 TEL 03 (3758) 2533 (代)

この小冊子は森林認証紙を使用しています。